

都心の広場における居心地の良さをはかる新たな調査方法の探究

1881050 原田なつ

指導教員 佐藤峰准教授 三浦倫平准教授 野原卓准教授

1.はじめに

1-1 研究背景

社会的にも日常の生活の質の高さが求められる現代において、日常に癒しや寛ぎを与えてくれる公共的空間が求められるようになった。またコロナ禍によるニューノーマル時代に突入しさらに公共的空間の需要は高まったといえる。しかし日本では、街ではなく空間のみに焦点を当て、利用者の視点に基づいた空間の「居心地の良さ」に関する研究は未発達であり、行政は公共空間の整備のための有効な調査を行うことが出来ていないのが現状である。

1-2 本研究の立ち位置と目的

そこで本研究では国内にて行政が都心の広場を調査する調査方法の検討を行った。調査の結果、現在の調査方法は種類が少なく東京都23区内で行われている調査方法は5種類のみであった。民間委託してコメントを集めるなどの取り組みも見られたが、行政主体で行う調査はほとんどが緑の実態調査のみであった。そのような環境下で目黒区は利用者の視点を把握するための利用者数調査や区民意向調査を行っていたが、調査方法として調査形態や内容が不十分であり、空間の居心地の良さを把握するには繋がっていないという課題がある。

そこで利用者の感覚を把握するため、イメージマップというツールを用いたインタビュー調査を行うことにより、効率的かつ明確に人々の居心地の良さを把握すること

の出来る調査方法を提案することを目的とした。

2.研究方法

今回は研究方法として文献調査と実証実験を行った。まず文献調査にて国内外に関わらず従来の様々な「居心地の良さ」の調査方法、都市空間の調査方法を検討し、その調査方法の特性を理解し課題を明らかにした。次に対象地である洗足駅前ふれあい広場の利用者を対象にイメージマップを用いたインタビュー調査を2020年10月～2021年12月に実施し、イメージマップが利用者の視点の把握に繋がるのかを明らかにすることを目的とした。

3.「居心地の良さ」の定義

3-1 居心地の良さを従来の調査方法

「居心地の良さ」という主観的な感覚は、医工学や心理学など様々な学問から研究されているが、物理的に測定不可能であったり、人間関係との相関が考察されたりしており、空間と人間との関係のみに焦点を当てた「居心地の良さ」の研究に関しては未発達であることが分かった。

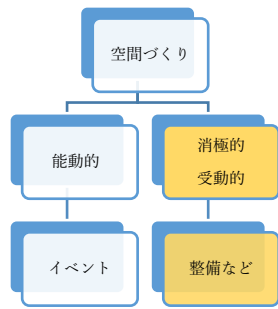
3-2 「居心地の良さ」の定義

まず「居心地の良さ」とは利用者側の感覚であり、居心地について考えることは対象物に対し利用者視点で考えることが前提となる。以上を踏まえた上で本研究における定義は、その空間に訪れた人（利用者）が、「落ち着く、このままずっとここに居続けたい」と感じることである。この感覚のポイ

ントは受動的であることだ。

空間づくりを行う目的には2種類あると考える。(図2参照) 1つ目は観光スポットとして宣伝を行ったりイベント等を開催したりすることにより、人々に能動的にその空間に行きたいと思わせるような空間づくりである。2つ目は空間の整備を行うことにより、人々が訪れた時に、このままずっと居続けたい、落ち着く、目的はないがこの場にいたいと受動的に思わせる空間づくりである。本研究では後者の空間づくりに着目し調査を実施することとした。

図1 「空間づくりの分類」 筆者作成



4.都市空間の調査方法における従来の研究

4-1 海外における都市空間の調査方法

本稿では人間を主役に置いた公共空間のありかたについて先駆的な研究を行なっているパブリックライフ学に依拠した具体的な調査方法を9つ挙げる。

調査方法を方法の観点から大きく分類すると3つに分けられる。

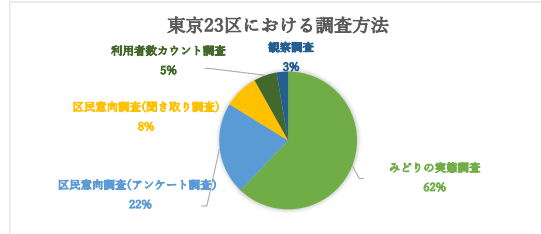
表1 調査方法の分類 筆者作成

観察調査	有識者による 実地調査	聞き取り調査
カウント調査	写真撮影	聞き取り調査
マッピング調査	観察日誌	
軌跡トレース調査	実地調査	

行動追跡調査		
痕跡を探す		

4-2 国内における都市空間の調査方法

図2 「東京23区における調査方法」 筆者作成



上記の表から東京23区の行政において行われている公園に関する調査は大きく分けて5種類あることがわかった。割合は図2の通りである。みどりの実態調査や調書などの公園や広場の量的データの調査のみを行なっている行政が多く、利用者視点の聞き取り調査を行なっている区は全体の8%のみであった。アンケート調査やカウント調査を行なっている区も全体の27%と少なく、さらに調査内容が公園全体の満足度や選択肢のあるインタビュー調査など、空間の利用者のニーズを把握することが目的ではない調査であった。また利用実態調査の調査内容が公園の利用頻度を問うだけであり、公園や広場等の空間を充実させるために活かすデータとは言い難いものであったりする等の課題が挙げられた。したがって東京23区にて公園の利用者の声を聞く行政の調査は調査方法として不十分であり、改善の余地があることが分かった。

5.実証実験を通じた調査方法の検討

5-1 イメージマップを用いた調査の検討

これまでの調査から人間に注目を置いた空間づくりのためには利用者の視点を把握することが重要であるが、直接利用者の視点を把握する調査の方法であるアンケート調査、インタビュー調査には課題が多い。

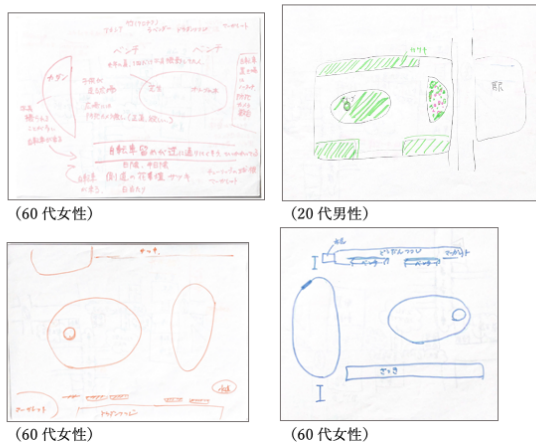
そこで、より明確かつ効率的に居心地の良さを把握できるツールとして、本調査ではイメージマップを用いることを提案する。イメージマップは「都市のイメージii」(リンチ 2007) にて用いられ研究されている、都市を評価するためのツールである。

5-2 イメージマップを用いた実証実験

表2 「調査日時と調査対象者」 出所：筆者作成

調査段階	調査人数	調査対象者	実施日時
プレ調査	3名	家族	2020/10/8
実地調査①	4名	洗足グリーンクラブの方々	2021/01/04
実地調査②	7名	近所の方々	2021/11/18-12/2

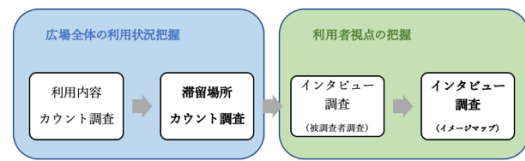
それぞれ調査後に課題と改良点をアプローチとして整理し、そのアプローチに従い次の調査を行うという過程を繰り返し計3回実施した。



5-3 調査方法の提案

その過程から導いた新たな調査方法を以下に提案する。まず調査方法は全体の利用状況を把握する調査と利用者の視点を把握する調査の2種類が必要である。そこでカウント調査(2種類の調査シートあり)とイメージマップのツールを用いた聞き取り調査の2つの調査方法を組み合わせて行うこととする。

図3 「新たな調査方法の概念図」 出所：筆者作成



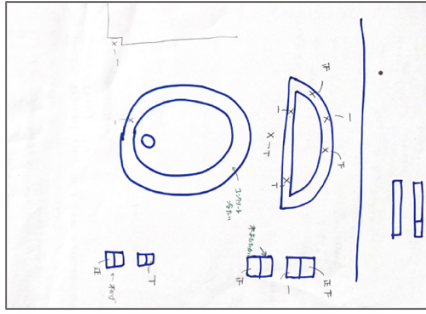
全体の利用状況を把握するための調査方法としてはカウント調査を行う。最も調査がしやすい方法がわかりやすいからである。本調査では利用内容カウント調査シートと滞留場所カウント調査シートの2種類の調査シートを用いる。滞留行動内容調査シートにおける滞留行動内容の項目は実地調査を経て改善を重ねた結果以下の項目となった(図4)。

図4 「利用内容カウント調査シート」 出所：筆者作成

公園利用者数調査シート		調査日時					天候		
		平日/休日		13:00		15:00		19:00 計	
公園名称		8:00	10:30	13:00	15:00	19:00	計		
調査日時									
気象									
利用層									
	幼児								
	小学生								
	中学生								
	成人								
	60歳以上								
利用内容									
	(トイレ)								
	通過								
	休憩のみ								
	スマホを操作								
	自転車置く								
滞在行動内容/立つ									
	座る								
	飲み物を飲む								
	荷物を見る								
	休憩								
	目を流し込む								
	用を済ませる								
	挨拶や挨拶								
	読む								
座る									
	座る								
	飲み物を飲む								
	荷物を見る								
	休憩								
	目を流し込む								
	一旦立ち止まり用を済ませる								
	挨拶や挨拶								
	読む								
	電話								
	喫煙								
	スマホ、PCを見る								
	その他								
グループ構成									
	ひとり								
	夫婦、家人								
	友達、友達外								
	グループ								
	園内保育								
	計								

またそれらの行動がどこで行われたかも把握するため、滞留場所調査シート(図5)を用いてその空間のマップ上に滞留者数をプロット(滞留場所が重なった場合は正の字で数をカウント)し、滞留場所を記録することで全体の利用状況を把握する。

図5 「滞留場所調査シート」 出所：筆者作成

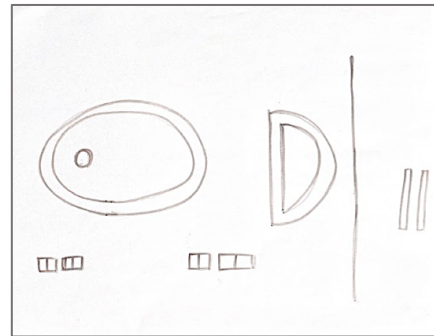


利用者視点の調査としてはイメージマップを用いた聞き取り調査を行う。聞き取り調査を行う理由としては、誰に対しても居心地の良い空間にするために、利用者の意見を聞き取りした方が良いということと、有識者による実地調査は各行政に有識者が必要になってしまうからである。研究を行う際には有識者による実地調査も有効ではあるが、行政が政策の一環として、誰に対しても居心地の良い空間を作るためには、幅広い年代の利用者の方に聞き取り調査を行う方法が良いと考えた。

このときの手順としては、まず被調査者の公園の利用状況についてインタビュー調査を行い、気がついたことをイメージマップに描き込んでもらうという流れで実施する。この時マップを用いる際に気をつけるべき点が3つある。1点目は広場の大まかな配置図を元から描いておくことである。白紙からでは何を描いたらいいのか分からず、見本を写す人が多発するためである。この時、広場の図は絵のみで文字を入れないことが重要である。なぜなら被調査者の好みに合わせて縦横を変えられるようにした方が良いからである。ちなみに、この大まか

な配置図は白紙から描くイメージマップとは異なるため、**イメージ書き込みマップ**と命名することとする。2点目は、何か気づいたことは絵にこだわらず文字でも良いので補足してもらうことだ。絵を描いて欲しいという言葉に戸惑ってしまう方の抵抗を少しでも減らすため文字での描き込みを促す。3点目はイメージのスタート地点とゴール決めそれに従って聞き取りを行うことである。リンチのイメージマップでは、道順からイメージ想起するという過程を作ることが調査方法のポイントとして挙げられていた。

図6 「イメージ描き込みマップ」 出所：筆者作成



6.結論

以上の調査を実施することで明確かつ効率的に居心地の良さをはかることが出来ると考えた。

しかし今回の調査はデータ数が少ないこと、調査対象の広場が1つしかないことが課題である。今後は他の種類の広場や公園などでも調査を行うことにより、多様な公共的空間に通ずる調査方法を提案し、日本の公共的空間をより居心地の良いものにしていくことに貢献したい。

i)ヤン・ゲールにより人間の行動を理解し、パブリックライフを体型的に調査する手法を検討する研究

ii) Camillo Sitte, Kevin Lynch, 1960 『The Image of the City』 (丹下健三・富田玲子訳, 2007, 『都市のイメージ』, 岩波書店)